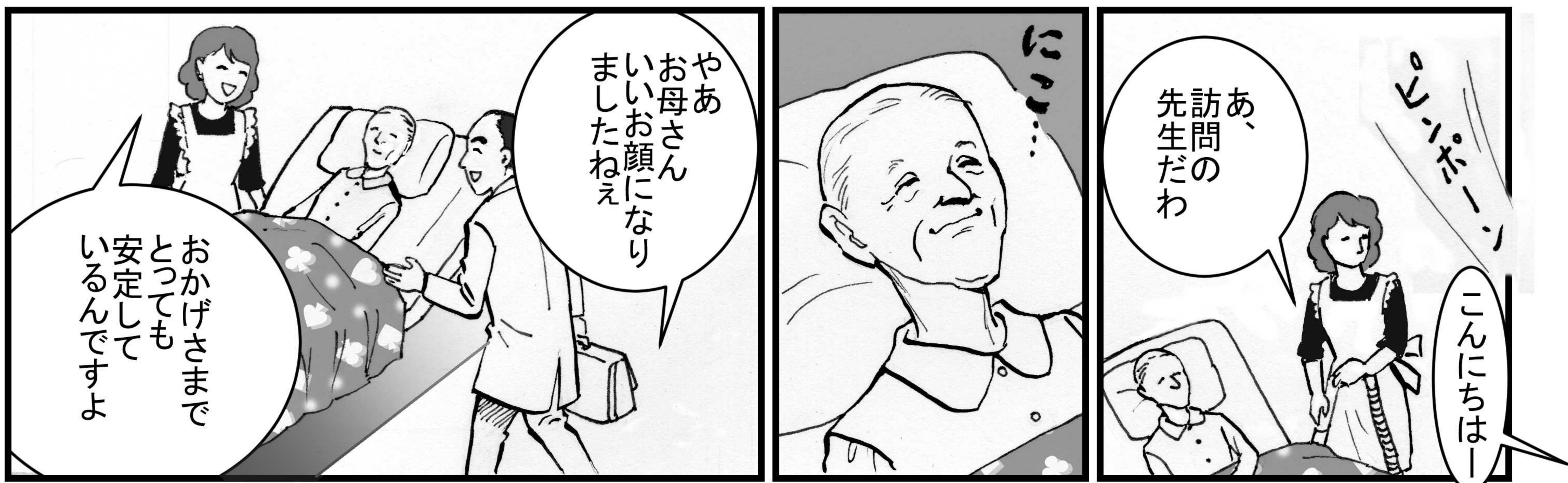
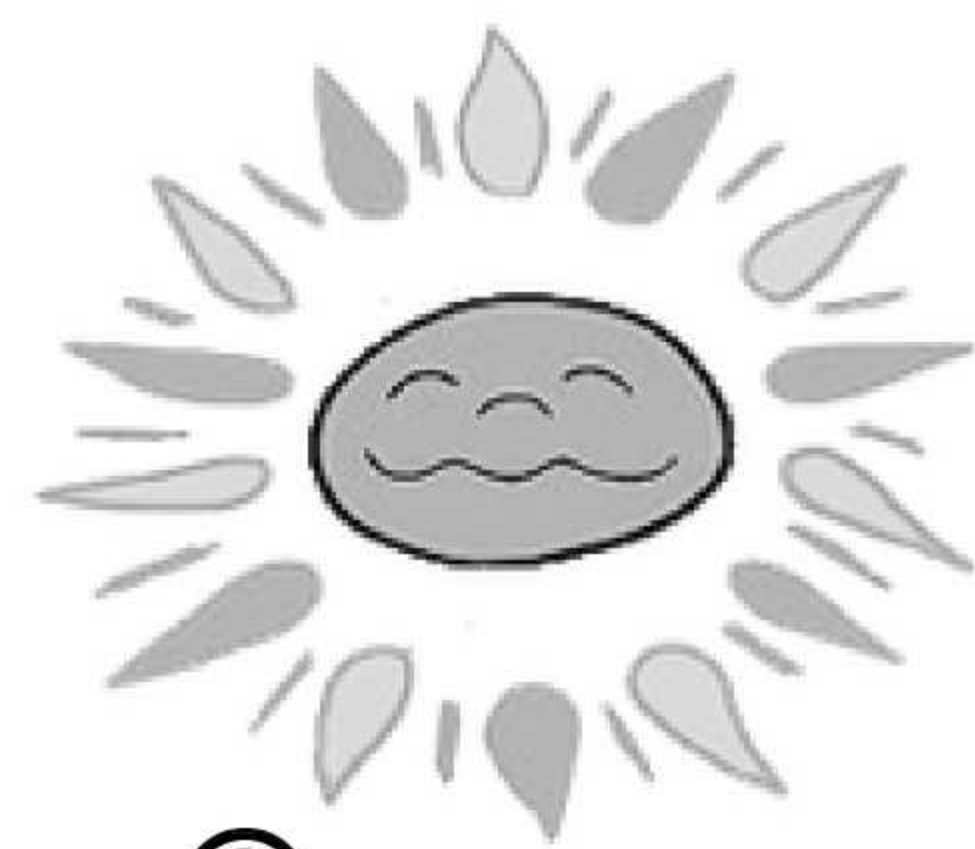




せつかく
聞かれたから
お話ししま
しょう

もう
30年くらい
前なん
ですけど

当時私が働いていた
鹿児島島の病院では
患者さんの自宅に
往診する
システムが
ありました

私が担当したYさんは
乳がんの全身移転で
入院していました

入院中は
私はベットサイドで
診察し
病状変化に
目を凝らし
血液データや
画像を分析して
治療内容を
決定していく
作業に
必死でした

ご本人の希望で
一時的に
退院された
時があつて

退院2週間目の
往診の日
自宅を訪ねたのです

そこで

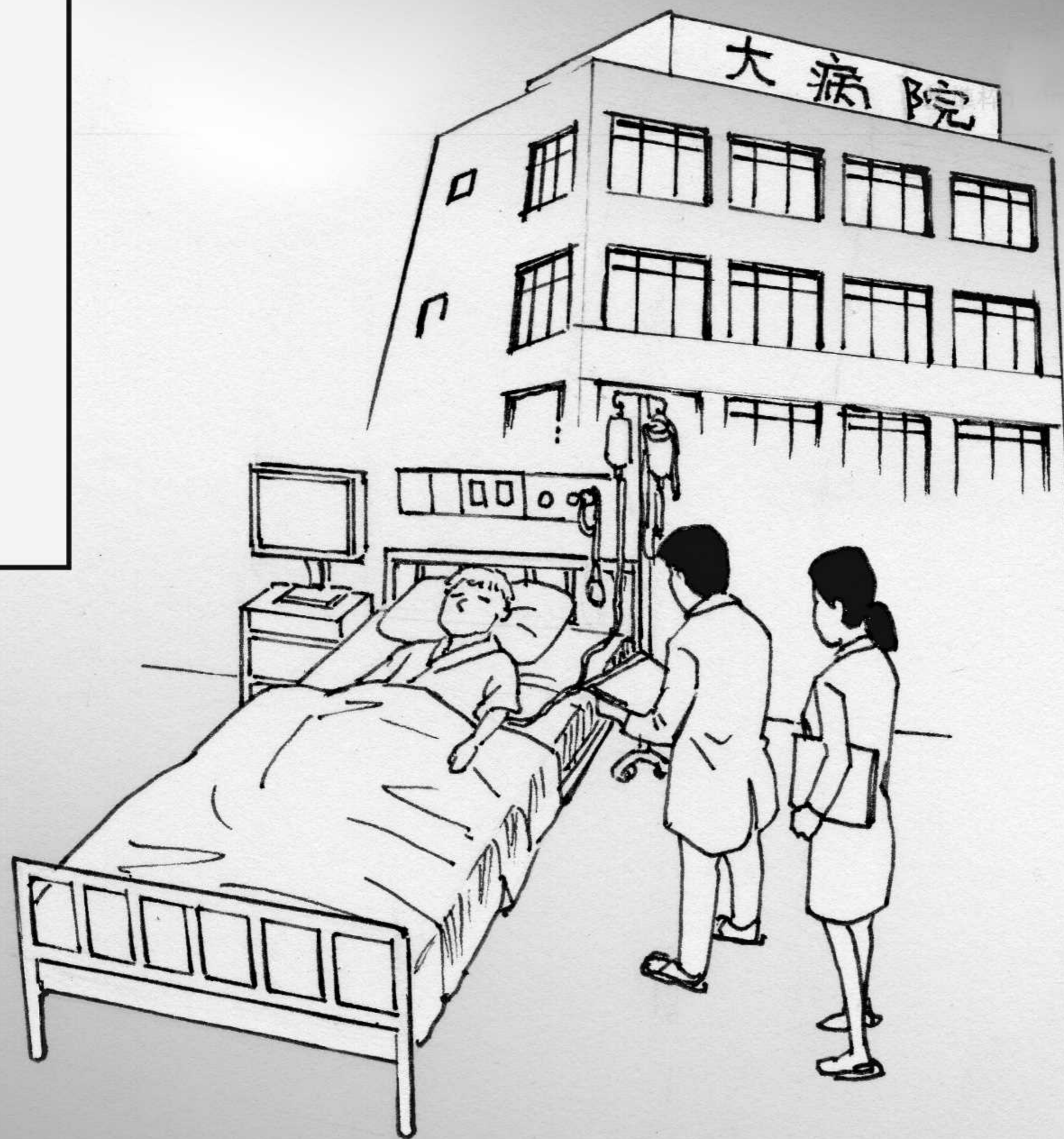
その方は
洋服に着替え
お化粧をして
おられたんです

私は
目を疑い
ました

病院にいる時と
まるで
別人でした!!

夏休み中のお子さんたちを
見つめる慈愛に満ちた
まなざし
母親の姿が
そこにはありました

それから一か月後
ほとんど
食事がとれなくなって
病院に戻られ
再び治療が始まりました



そして
半年後
昏睡状態に
陥った彼女に
人工呼吸器がつけられ

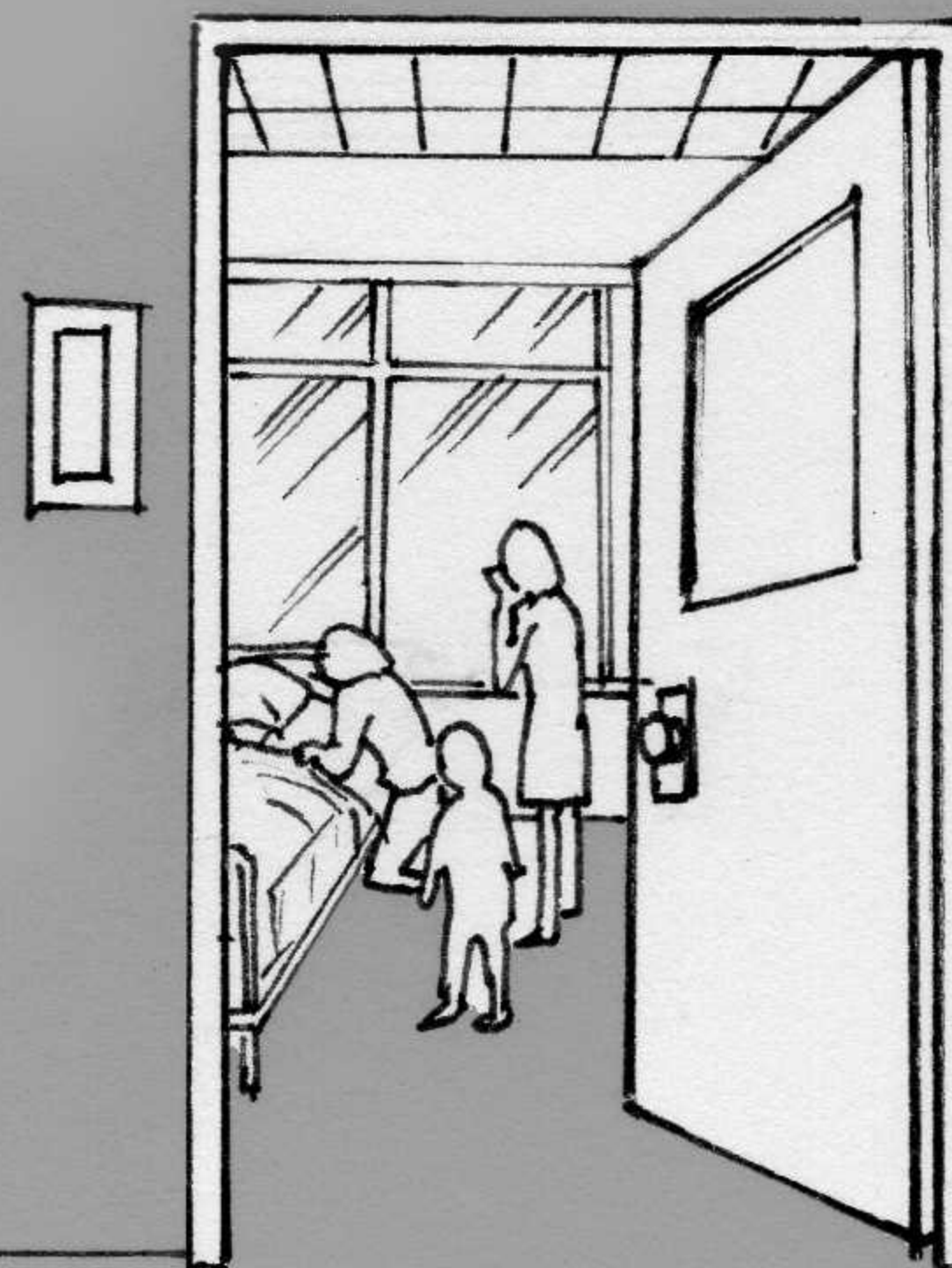
心臓マッサージが
施されました

亡くなってから
家族が呼ばれ

死亡が
告げられ
ました

病院に居るYさんは
初め、私にとっては
多くの患者さんの
一人に過ぎませんでした

しかし母として
妻として自宅で
生活するYさんに
出会ったとき



私は
愕然としました
これまで
病院で
何を見て
何をしてきたん
だろうと

往診という
機会が
なければ

私の意識に
変化が起ころうとは
なかったかもしれませ

人生の背景や歴史を
垣間見た私にとって
その「死」は単なる
「生命の終わり」では
ありませんでした

在宅医療は
そこに携わる
者に対して
医療の
あるべき姿と

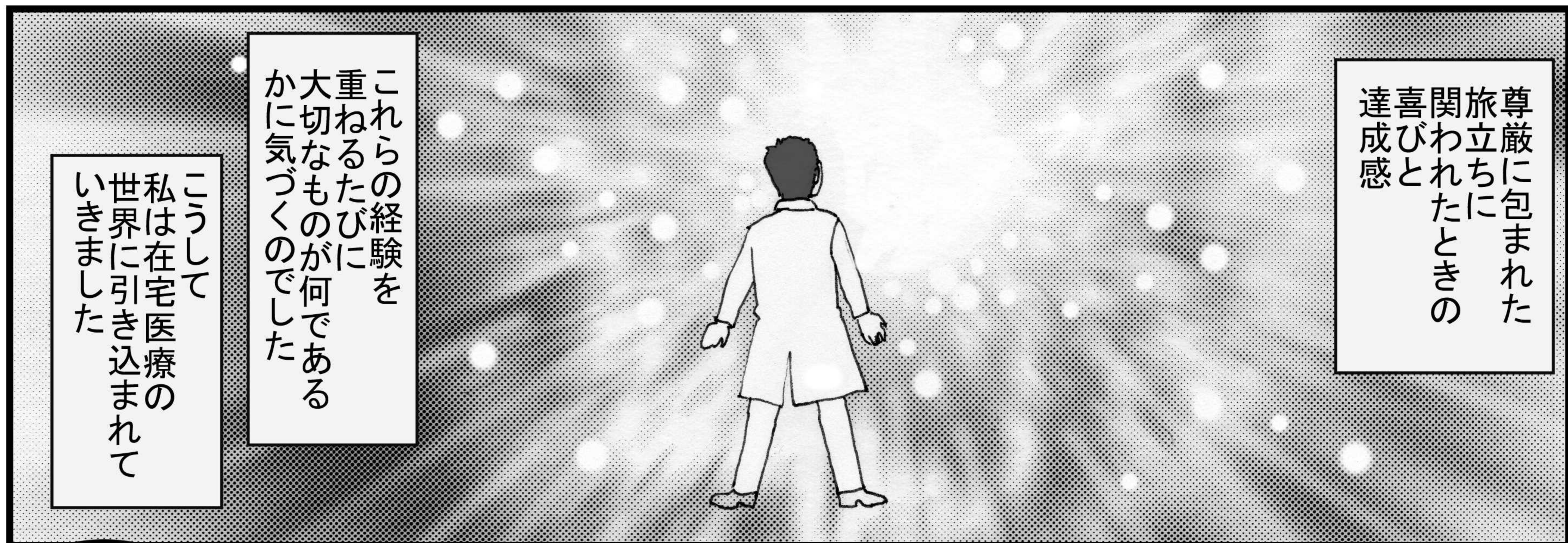
そして
人間として
先ずどうあるべきか
という命題を常に
突きつけてきます





家という空間が
もたらす
患者さんや
ご家族の笑顔

老いても、病んでも
どんな状態になっても
人は最後まで成長し
誰かを成長させる



尊厳に包まれた
旅立ちに
関わられたときの
喜びと
達成感

これらの経験を
重ねるたびに
大切なものが何である
かに気づくのでした

こうして
私は在宅医療の
世界に引き込まれて
いきました



また
お話を
聞かせて

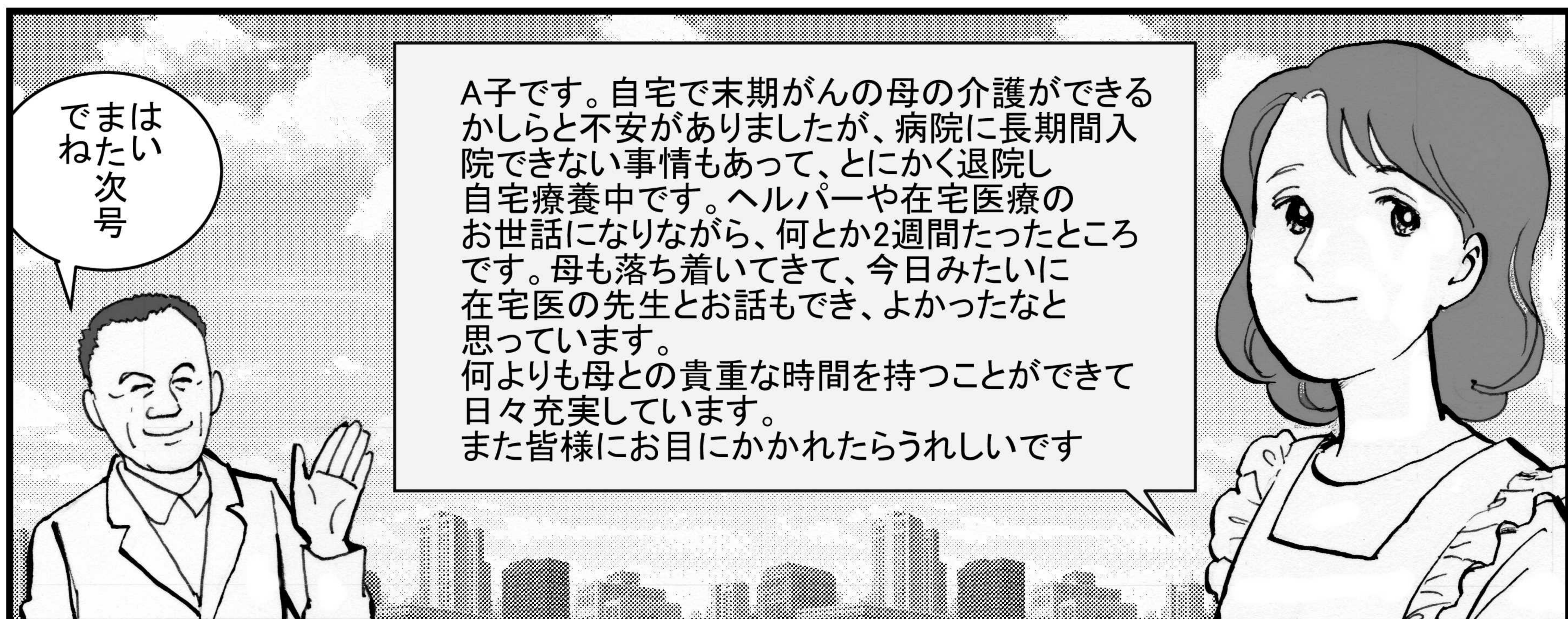
はい
また
きますからね
楽しみに
してください



まあ
先生
素晴らしい
ですね

おひとり
の
おひとりの
いのちが
素晴らしい
のです

というわけで 今回はこれにて終了



では
また
次号

A子です。自宅で末期がんの母の介護ができる
かしらと不安がありましたが、病院に長期間入
院できない事情もあって、とにかく退院し
自宅療養中です。ヘルパーや在宅医療の
お世話になりながら、何とか2週間たったところ
です。母も落ち着いてきて、今日みたいに
在宅医の先生とお話もでき、よかったなと
思っています。
何よりも母との貴重な時間を持つことができ
日々充実しています。
また皆様にお目にかかれたらうれしいです